

アスリートの「語り得ない」コメント
同志社大学体育会選手のインタビューコメントをもとに

学籍番号 12022081 番 寺本美佳

指導教員 立木茂雄

2005年12月

目次

- 1 序論
- 2 先行研究の展望
 - 2.1 インタビュー
 - (1) 対話的構築主義
 - (2) 「生」の三様態
 - (3) 支配的言説
 - (4) ラポール
 - (5) インタビューの「編集」と「構成」
 - 2.2 「語り得ない」もの
- 3 調査
 - 3.1 調査概要
 - (1) 調査用具
 - (2) 調査対象者
 - 3.2 データ分析の手順
 - (1) 調査の具体的な手続き
- 4 結果
 - 4.1 コメントの整理分類
 - (1) スポーツ・イデオロギー
 - (2) 「武士道」的モラル
- 5 考察
 - 5.1 語られないコメント
 - (1) 純心さ、潔癖さの消失
 - (2) 身体鍛錬の場としてのスポーツ
 - 5.2 語られるコメント
 - (1) 「自分のプレー」
 - (2) スポーツにおける「楽しさ」
 - 5.3 語り得ないコメント
 - 5.4 おわりに

1 序論

「自分がヒーローインタビューのお立ち台に立っている姿を想像しながら打った。」
7年前のダイエーホークス（現ソフトバンクホークス）城島健治捕手のインタビューコメントだ。一打逆転の打席で誰もが期待した逆転タイムリーを打ち、彼は本当にお立ち台でこのコメントを言った。彼が、本当に自分がお立ち台に立っている姿を想像したかはわからないが、彼が逆転タイムリーを打った瞬間、そこにドラマが生まれたことは事実なのだ。

「アスリートの生の言葉を聞きたい。」この想いで私は大学で体育会スポーツ新聞編集局に入った。入部当初からアスリートの「ホンネ」を聞きだしてやろうと張り切っていたが、インタビューコメントにしばしば違和感を感じるがあった。

硬式野球で完全試合を達成した投手の「これだけの投球が出来たのは、捕手や野手がバックで守ってくれているおかげ」というコメント。逆に投手が打たれたとき、捕手は「最後は自分の配球ミスです。（打たれた投手）は本当によく投げてくれました」と語る。仲間の不調で苦しい試合を行ったフェンシング主将の「ピンチだと感じたことはなかった。お互いを信じていたから」という言葉。他にも、「点数のことは考えていなかった。心からプレーを楽しむだけ」、「個人の結果なんてどうでもいい」、「優勝は通過点に過ぎない」など、いわゆる「お決まり」のコメントが数多く存在することに気付いた。

インタビュー中、これらのコメントに違和感を感じながらも、私はコメントをメモし続けた。「ホンネ」を語ってほしいという気持ちがある。しかし、記事にする上で必要な「お決まり」のコメントも欲しい。アスリートたちに決して語られない、いや「語り得ない」言葉の存在に気づきながらも、「このコメントは使える、使えない」と無意識のうちに取捨選択し、その「タテマエ」を使って記事を書いていたのだ。

インタビューコメントの形成要素として「インタビューの状況」、「インタビュアーとの親密度」、「競技形態（団体競技／個人競技）」、「アスリートのパーソナリティ」があるという仮説をたてた。本論文では、この仮説を検証することを目的とするだけでなく、インタビューコメントの形成要素を明らかにした上で、考察を2部構成とする。第1部ではアスリートの語られるコメントを考察し、第2部では「語り得ない」アスリートのコメントにスポットをあて、そのコメントの背景を、アスリート自身の言葉から探していきたい。

2 先行研究の展望

2.1 インタビュー

桜井厚は、『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』のなかで、インタビューとは調査者（インタビュアー）と被調査者（語り手）との会話であると主張する。語り手が紡ぎだす一個人の主観的な意味やアイデンティティをできるだけすくい取り、インタビュアーとの相互行為を通して社会を読み解くライフストーリーインタビューを参考にし、インタビューの性質を述べていきたいと思う（2002）。

(1) 対話的構築主義

インタビューとは調査者（インタビュアー）と被調査者（語り手）との会話である（桜井 2002）。つまり、インタビュアーの質問 語り手の語り インタビュアーの応答の連鎖によってインタビューは構成されていくのである。インタビュアーの質問に対する語り、かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたものではなく、語り手とインタビュアーとの相互作用を通じて構築されるものである、とする見方を「対話的構築主義」という。ライフストーリーを、語り手とインタビュアーとの「共同作品」とあるとか、インタビュアーの立場を、語り手の「個人誌」に対する「影の個人誌 shadow biography」とよぶのは、そうした見方から出てくる（桜井 2002）。

また、ある人の体験した過去の出来事は、口述 / 記述される場合には言語的様式の制約を受けて表象される。つまり、過去に体験された出来事は、意図的な嘘や作り話でなくても変形され伝えられる。そのうえ、語りには現在の語り手の動機が作用する。語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならないのである（桜井 2002）。

インタビューの過程の相互行為によってライフストーリーが<いま-ここ>で構築されるとすると、語りそのものは語られる場によって変化する。人が遭遇した出来事や自分の経験を語るときのひとつの方法は、いかにそれが起こったか、どのような人が関係し、いかなる結末を迎えたか、といった形態をとることである。出来事の経過や登場人物の考えや行為のなかに、語り手とインタビュアーの解釈がふくまれて、一つのまとまりをもった語り構成される。そのテキストは、語り手の経験となんらかの関連をもっているが、語り手が実際に歩んできた人生とは相対的に独立した筋書きをもったストーリーなのである。

しかも、それが語り手の経験に意味をあたえ、さまざまな経験を秩序立て構造化している
のである。これが「ライフストーリーの物語的構成」という性質である（桜井 2002）。

眼を向けるべきなのは、ライフストーリーの生成に直接かかわるインタビューの場では
ないだろうか。相互行為に焦点を合わせると、たとえ自由なインタビューといえども、標
準化された質問紙インタビューとおなじように、調査者は作為的にインタビューを統制し
ようとする力を働かせる。インタビュアーが聞きたいことを質問できなかつたり語り
がインタビュアーの意図とは別の話題になったとき、いらだちを感じたり、ときには強引に話
題を転換させることなどは、私たちがよく経験することである。とりわけ、語ることは、
過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に<いま-ここ>を語り手とインタビ
ュアーの双方の「主体」が生きていることである、という視点は、対話的構築主義ア
プローチにおいては基本的なことである。インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文
化的営為の場なのである（桜井 2002）。

（2）「生」の三様態

実際に起こった出来事や語り手の経験と、それを語ろうとする言語行為にはギャップが
ある。それをわかりやすく理解するために、桜井は、「生」を3つの様態にわけて考えてい
る。E. Bruner（1989）によると、私たちの「生」には、それぞれが互に対応しているの
だが異なる3つの^{ライフ}生がある。生活としての「生」Life as lived、経験としての「生」
life as experienced、そして語りとしての「生」life as toldの3つである。

それぞれを（体験）（経験）（語り）と短く表現することもある。生活としての「生」（体
験）とは現実に起こった出来事のことであり、外的な行動として現れた振る舞いであって、
第三者にも観察可能である。もちろん、彼/彼女が外的な行動にどのような主観的意味をあ
たえているか、動機は何かということになると、第三者にとってのその理解は容易ではな
い。それに対し、経験としての「生」（経験）とは、語り手のイメージ、感覚、感情、欲望、
思想、意味などをともなって成立するものである。彼/彼女の経験について、私たちは推論
を働かせたり、なんらかの手がかりをもとに解釈したりすることはできるのだが、直接、
その経験をしることはできない。そして最後に、語りとしての「生」（語り）がある。語り
としての生とは、ライフストーリーを中核とする言語的表象であって、言語行為としての
文化的慣習、聞き手との関係や社会的文脈によって左右されるものである（桜井 2002）。

ただし、3つの生の様態にわけて考えるのは、あくまでも便宜的である。私たちは、こ
れらの統合体としてのひとつの「生」を生きているのである。では、インタビュー過程を

とおして語られるストーリーは、どのような生の内実を表しているのだろうか。あらかじめ断っておきたいのは、ストーリーテリングは、通常、虚構や幻想、偽装と結びついていることがある。本書では、心理学者の T. Sarbin がいうように「虚構は私たちが生きている生の現実の一部である」というベンサム流の世界観に賛成している。「語りは、エピソード、行為、および行為の説明を組織化する手段である」(Sarbin 1986)が、同時に経験的出来事と想像との合成にほかならず、そこには出来事の原因や語られない行為者の行為の動機を推論したり、抽象的、不明瞭な言葉の意味をもっとわかりやすくするためにイメージを創造したりすることなどがふくまれる(桜井 2002)。つまり、人間は限られた認識能力と言語能力とで世界を意味づけようとする。体験した出来事との間に確固とした結びつきがない場合、個人はそれらを組織して、一貫性についての検証に耐えられるように想像力を働かせて定式化をはかるのである(Sarbin 1986)。

この語りにおける「一貫性」については 2.2「語り得ない」もののなかで詳しく述べる。

(3) 支配的言説

個人は、アイデンティティを求めたり、自分の生活を築くために過去の出来事や行為を秩序づけ、個人的な語りを構成する。そのとき、こうした一般的な語りがモデルとされる。時代の状況に適った語りがあり、時代の変化とともに新しい語りが登場し、今度は新しい語りが社会の変化をうながすのである。そう考えると、筋^{プロット}などの形式分析のほかに語りが生産されるコンテクストにも注目する必要があることに気づく(桜井 2002)。

語りには一定の様式がある。その語り方は、あるコミュニティ内で流通し、それを語ればただちに了解されてしまうものであり、同時にそう語ることがコミュニティの成員を証す語りのことである。特定のコミュニティ内で特権的な地位をしめる語りをモデル・ストーリーとよび、全体社会の支配的言説(支配的文化)をマスター・ナラティブとよんで、社会規範やイデオロギーを具現する語りに位置づけている。さらに、言語は、たんに事態や出来事の叙述の仕方を伝えるのではなく、人々の動機をつくりだし行為に導く機能をもつ。個人の経験や人生は語りを通じて人々に共有され、社会の経験や歴史に属するようになる。語りは普遍的な人間活動あるかのように見えながら、社会生活ではきわめて語りにくい経験がある(桜井 2002)。

(4) ラポール

新社会学辞典でラポールは次のように説明される。

面接調査を行う場合、調査が客観的であることは重要だが、それをあまり強く意識しすぎて機械的に接し、相手に嫌がられたり、相手が非協力的になってしまうと、得られた結果は逆に客観性をもたなくなる恐れがある。したがって、正確なデータを収集するためには、調査員と被調査者との間に一定の有効関係を成立させ、調査を円滑に行うことがひとつようになる。両者の間に結ばれるこの友好的な関係をラポールとよぶ。

『新社会学辞典』用語解説（森岡ほか 1993）

「客観的」で「正確な」データを被調査者から聞き出すためには「一定の友好関係」を築く必要がある。「非常によいラポール」とは「ある程度の親密さ」であって、「過度な親密さ」のことではない。友好的に、だがあまりにも友好的になりすぎないように「be friendly but not too friendly」というのがインタビューの基本。信頼できるデータを得るために、すなわち、真の（本音の）語りを聞くために調査者に必要なスタンスとされてきた。ゆえに、ホンネの発話をうながすために、これまでは調査者と語り手（被調査者）のラポールの形成、すなわち信頼関係の形成が強調されてきた。だが両者の関係が深まれば深まるほど「真の」「ほんとうの」語りが生み出されると考えてよいのだろうか。インタビューの相互行為的特質から、ラポールといわれる調査者 - 被調査者関係が決して前もって規定されるべきものではないことがわかる。こうした関係は、インタビューの過程をとおして実践的に構築されていくものである（桜井 2002）。

フェミニスト・エスノグラフィーの考えでは、調査者は被調査者に敬意を払い、力をあたえ、協力的でなければならず、調査者と被調査者の関係は信頼性や相互性にもとづく平等主義であるべきだとするが、いずれも調査者 - 被調査者関係のあり方が情報の質を決定するという点では同じ認識を表明している（桜井 2002）。

このように、インタビューの場面では、「インタビュアーと語り手の親密度」というものが調査になんらかの影響を与えるとされてきた。

インタビュアーの権力が強い場合、語り手はインタビュアーの聞きたいストーリーを語る傾向があるといわれる。人々はインタビュアーが期待しているモデル・ストーリーをあえて語ることもあるかもしれない。モデル・ストーリーの存在によって沈黙を余儀なくされ、無視された語りの断片があることに、私たちは敏感でなければならない。インタビューの過程における、言いよどみ沈黙、矛盾や非一貫性こそ、ストーリーそのものの裂け目をなくし、新しいストーリー生成の萌芽であることを忘れてはならない（桜井 2002）。

（5）インタビューの「編集」と「構成」

小林多寿子は、1995年『インタビューからライフヒストリーへ 語られた「人生」と構成された「人生」』において、ライフヒストリー（個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したもの）が、どのようなプロセスを経てライフストーリー（個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー）となるかについて説明する。

「人生」を語る主体である語り手／調査対象者であり、もうひとつは「人生」を構成する主体である聞き手／調査者／研究者である。これらの二つの主体に着目するのは、「共同制作としてのライフヒストリー」という視点にもとづいているからである。インタビューは相互作用である。この相互作用は、聞き手と語り手の対面的なコミュニケーション状況といいかえられる。そして、研究者は、インタビューでの話をライフヒストリーとしてもちいるとき、なんらかの「編集」あるいは「構成」という作業を行っている。このインタビューからライフヒストリーへというプロセスは、語られた話を「人生」の物語に編成させるプロセスであり、他者へ経験を伝えようとするプロセスなのである（小林 1995）。

スポーツ新聞においても、アスリートのインタビューでの話を新聞記事にするプロセスは同様のことが言える。語られた試合のエピソードを、「編集」、「構成」という作業を行うことによって、新聞記事という物語を編成しているのである。

2.2「語り得ない」もの

浅野智彦は、2001年『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』において、「語り得ない」ものの存在について言及している。このなかで、自己は自分自身について物語ることを通じて産み出されるということ、そして自己物語はいつでも「語り得ないもの」を前提にし、かつそれを隠蔽していると主張している。

自分自身が何者であるかを説明しようとするなら、人は自分自身のエピソードのうちあるものだけを選びだし（他のものを捨て）それをある筋にそって紡ぎ合わせていく。＜自己が自己物語によって産み出される＞というのは、このエピソードの選択と配列を通じてはじめて「私」が現れてくるということなのである（浅野 2001）。

自分自身について語る物語は、その結末部分において今ここにある自分（物語を語っている自分）に説得的なやり方で到達する必要がある。自己は、それが物語られる限りにおいて、必ず結末から逆算された（振り返った）形で選択・配列されるのであり、事実ありのままの記述ではあり得ない。物語は本質的に他者に向けられた語りである。納得いくように語るということは、したがって聞き手（他者）を納得させるように語るということに

ほかならない(浅野 2001)。

ここで注意するのは、「語り得ない」という事態は単に「語り尽くせない」という事態とは違うということである。ここでの「語り得なさ」とは、まさに自己物語のただ中に現れてくるようなものであり、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうようなものである(浅野 2001)。

自己物語の内部抱え込まれた真偽未決定性や非一貫性の具体的な例を、「物語の宙ぶり」、「沈黙」、「未決定なエピソード」として浅野は説明する。

「物語の宙ぶり」とは、自己物語はそれ自身についての判断を含んでしまっている、言い換えれば、語りとその語りについての判断が同じ物語に属しているがゆえに、物語の信憑性が宙ぶりにされてしまっているという特徴である。「沈黙」とは、トラウマ的体験と呼ばれるものである。体験が当事者の人生において他の何ものにもまして決定的な意味を持つものであると想像されるのに、それにもかかわらず語ることができないものである。震災の体験、ユダヤ人たちが被った迫害に体験など、物語化を強く求めているにもかかわらず、語られ得ないような体験となっているといえよう。「未決定なエピソード」とは、自己物語に回収しきれない(物語の筋に収まりきれない)未決定なエピソードが出現するという形で「語り得なさ」が現れてくるものである。

このように、自己物語はその内部にこうした真偽未決定性や非一貫性を抱え込んでいる。自己物語が語り手の「私」をそれなりに一貫した存在として産み出していくとするならば、「語り得なさ」は何らかの形で隠蔽されていなければならぬ。

他者を「納得させるように物語る」、この「納得」は語り得なさを首尾よく隠蔽し、見えなくすることによって達成される。自己物語が他者によって受け入れられている限りにおいて、あたかも語り得なさなど存在しないかのようにことは進み、語り手の「私」もあたかも安定した同一性を備えているかのように現れてくることになる。それゆえ、自己物語を通じて語り手の自己が作り出され、維持されていくためには、聞き手である他者に物語を何とか受け入れてもらうことが重要であり、そのために様々な語りの技法が総動員されることになるだろう。Gergen(1983)がいうように相手に見せているふだんの行動も物語と整合するように調整されていなければならない。

人生のある時期での個人的な語りの語られ方は、過去や現在の経験、そして予想される未来を当人がどのように理解しているかの、内的に一貫した解釈として表現されたものである。このことは、語りの一部が語りのほかの部分と矛盾をきたさないということである。

他者を納得させ、妥当だと理解されるために、物語には一貫性が必要。そのために無数のエピソードの選別と配列という編集をし、ここから抜け落ちた『語り得ないもの』が必然的に生じる（浅野 2001）のである。

先行研究から、「インタビューの状況」、そして「インタビュアーの親密度」が、コメントに何らかの影響をあたえるということがわかった。序論でアスリートのインタビューコメント形成要素としてあげた残りの「競技形態（団体競技／団体競技）」、そして「選手のパーソナリティ」の2つを検証し、「語られる」コメント、そして「語り得ない」アスリートのコメントの背景を調査によって探っていく。

3 調査

3.1 調査概要

(1) 調査用具

仮説を実証するため、大学体育会アスリートのインタビューコメントを収集した。同志社大学体育会機関誌同志社スポーツアトムの部員取材メモ、機関誌同志社スポーツアトム（2002年5月23日発行第140号～2005年12月14日発行第162号）から収集。体育会機関誌同志社スポーツアトム編集局は、年6回新聞を編集し発行。活動期間は大学の1年生から3年生までの3年間。2年時に担当スポーツが決まるため、最低でも1年、最長で2年間担当クラブの春・秋リーグ戦など試合の取材を通じてアスリートに関わっていく。インタビューはICレコーダなどの録音ではなく、選手に取材をしながらメモを取り、コメントは記録される。インタビューは試合前、試合後のグラウンドや控え室、時間がとれない場合は電話など、場所や状況はさまざまである。

(2) 調査対象者

調査対象は、2002年から2005年の間、同志社大学体育会に所属したアスリート46名（男性36名、女性9名）とした。そのうち、団体競技種目アスリートは25名（男性23名、女性2名）、個人競技種目アスリートは19名（男性12名、女性7名）、団体・個人種目両方に出場しているアスリート2名（男性1名、女性1名）とした。

3.2 データ分析の手順

(1) 調査の具体的な手続き

体育会機関誌同志社スポーツアトム編集局員から借りた取材ノート 18 冊と新聞 23 部の中からコメントを抽出。コメントを整理分類していき、グループになったコメントの内容を反映したタイトルカードをつける。計 46 名の選手から 482 個のコメントを抽出し、12 のグループに分けた。その後コメントに見られる特徴について、アスリートに聞き取り調査をいった。聞き取り調査は、調査者である著者と、「ある程度の親密さ」があり、同志社大学体育会に所属、もしくは出身の計 3 名のアスリートに 2005 年 12 月に聞き取り調査を行った。そのうち 2 人はプロチームへの入団が決まっており、1 人はオリンピック出場選手ということから、インタビューの経験が他の大学体育会アスリートよりも多いと考えられる。それぞれ 1 時間程度、出来るだけ自由な形で語ってもらった。

4 結果

4.1 コメントの整理分類

計 482 個のコメントを整理分類し、以下の 12 のグループに分けることが出来た。

優勝も「通過点に過ぎない」と語るなど、現状に満足せず常に課題を見つけ出し、さらに上の目標を意識している。

敗北の悔しさや経験を次の目標へつなげる糧とする。

技術面の向上だけでなく、「意識」、「モチベーション」、「精神面」の強化を大切にしている。

常に「自信」を持ち、プレッシャーに負けない。気持ちの切り替えや、「マイナス」を「プラス」にする発想の転換がうまい。

「チームのために」という意識を持ち試合、練習に取り組んでいる。仲間のミスを責めない。自分のやるべきこと、「役割」を意識しながら試合、練習に臨んでいる。

失敗を恐れず「挑戦」したり、あえて厳しい環境に身を置いたりする。

「もっと強くなりたい」「やるからにはトップを目指す」、「後悔したくない」、「最後まであきらめない」と妥協は許さず、日々練習、試合に取り組む。

「負けたくない」と「結果」「勝ち」にこだわる。

その競技が「生活の一部」、「好きでたまらない」など、競技に対する強い思い入れがある。

「自分のプレー」「自分が納得」できるかどうか、「自分との戦い」にこだわってい

る。

強敵との対戦を「楽しみ」、苦しい練習や状況を逆に「楽しむ」。そして努力し、頑張ったからこそ「楽しかった」。

負けることの辛さ、壁を乗り越えることや勝利することの喜びを知っている。また努力は報われるということを知っている。

(1) インタビュー形成要素

個人種目アスリートのコメントは合計 204、団体種目アスリートのコメントは合計 278 得られた。個人・団体種目別に 12 のグループそれぞれのコメントを集計したものが下の表である。

表 1 個人・団体別コメントの集計

	現状に満足せず上を目指す	敗北を糧とし、次につなげる	技術面だけでなく「精神面」強化	「自信」を持ちブレッシングに負けない	「チーム」「仲間」「役割」意識	失敗を恐れず「挑戦」する	向上心を持ち妥協を許さない	「結果」「勝ち」にこだわる	競技に「自分の強い思い入れ	「自分のプレー」にこだわる	練習、対戦を「楽しむ」	勝利の喜びを知っている
個人	26	13	34	35	0	11	27	19	13	34	13	5
団体	36	22	31	27	60	2	13	29	10	39	20	17
合計	52	35	65	62	60	13	40	48	23	73	33	22

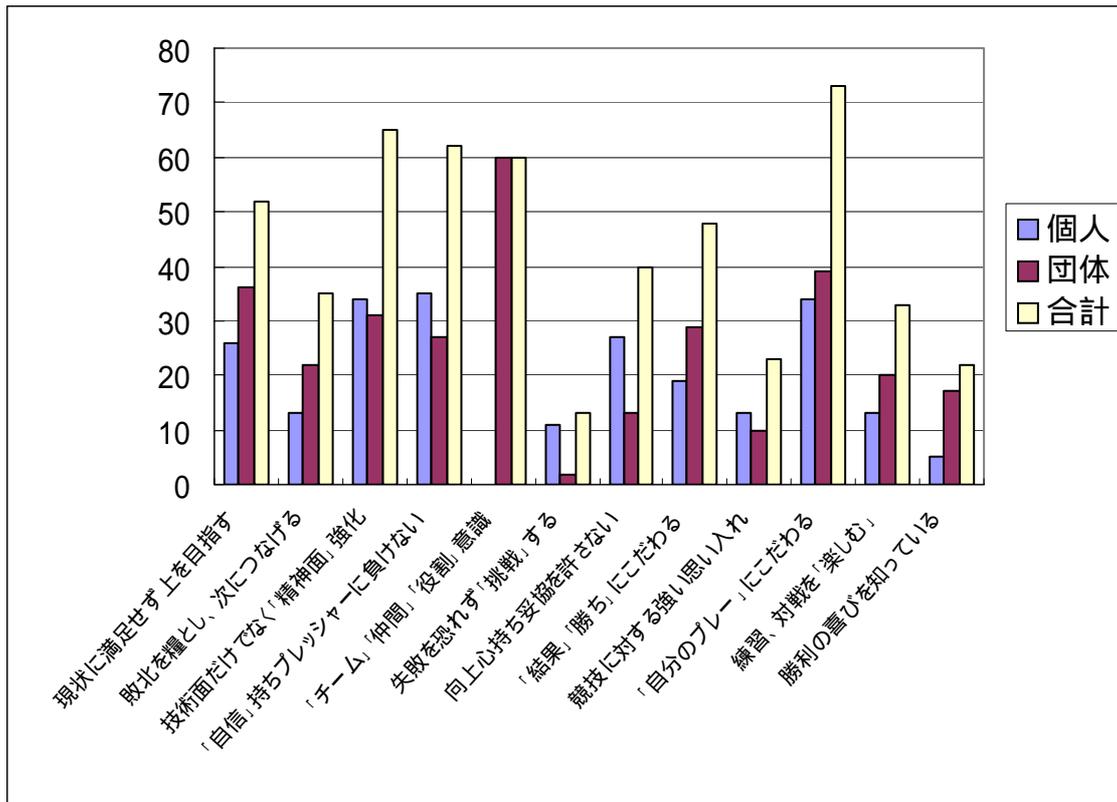


図1 個人・団体別コメントの集計

先行研究から検証できなかった「競技形態(団体競技/個人競技)」がアスリートのコメントに影響を及ぼすことは、団体競技アスリートのコメントから明らかである。とくに野球部員(硬式野球・軟式野球・準硬式野球)のコメントで顕著にみられた。

『負けて残念』では終わらせない。チームのために必ず勝つ」、「いつもまわりに支えられている。感謝している」、「後輩に優勝の経験をさせてやりたい」、「1人で野球はできない」、「今野球ができる環境に、ここにいるみんなに感謝したい」、「みんなでやっているから勝つとは簡単じゃない。でも勝ったときの喜びはその分大きい」、「何よりも仲間のありがたさを感じた」、「自分の記録のためではなくチームが勝つためのピッチングをするだけ」。常に仲間を配慮し、「チームのために」と口をそろえる。まさに「1人で野球はできない」。しかし、「チームのために」コメントの理由はもっと他のところにあると考える。この検証は、日本のスポーツ・イデオロギーのなかで述べよう。

表 2 個人・団体別分類されたコメントの割合

	%(度数)											
	現状に満足せず上を目指す	敗北を糧とし、次に糧としない	技術面だけでなく「精神面」強化	「自信」を持ち「プレッシャーに負けない	「チーム」仲間「役割」意識	失敗を恐れず「挑戦」する	向上心を持ち「協力を許さない	「結果」「勝ち」にこだわる	競技に対する強い思い入れ	「自分のプレー」にこだわる	練習、対戦を「楽しむ」	勝利の喜びを知っている
個人	12.7	6.4	16.7	17.1	0	5.4	13.2	9.3	6.4	16.7	6.4	2.5
団体	12.9	7.9	11.2	9.7	21.6	0.7	4.7	10.4	3.6	14	7.2	6.1

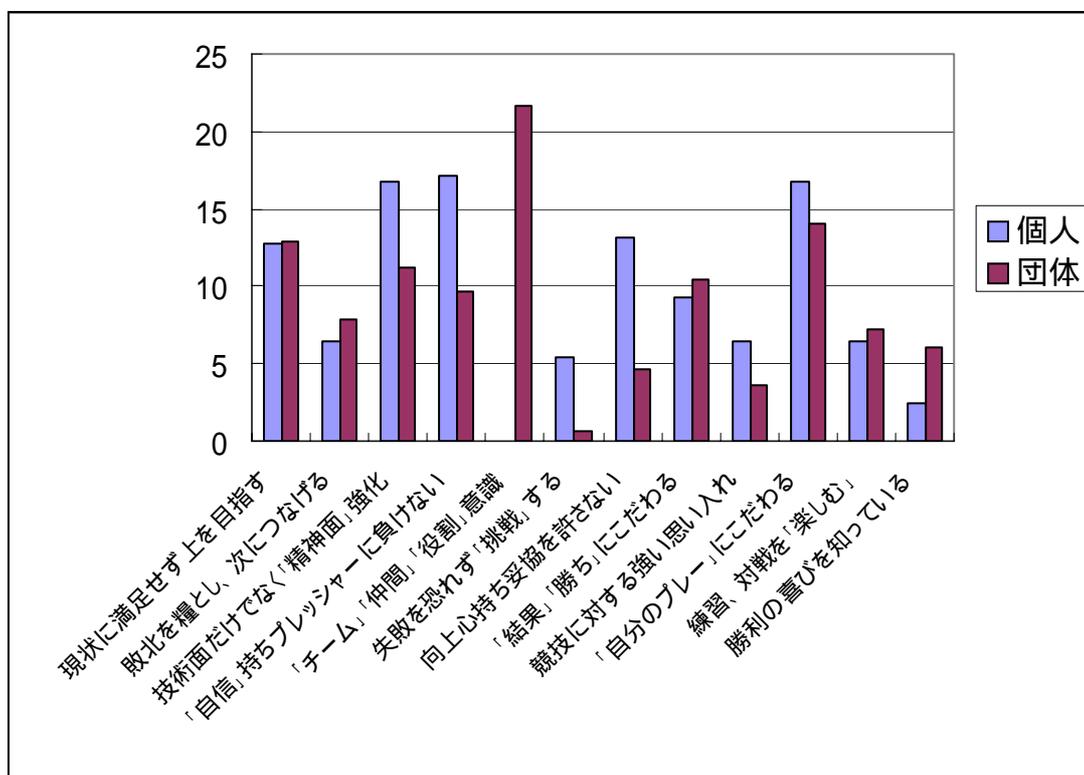


図 2 個人・団体別分類されたコメントの割合

図 2 は、個人競技・団体競技アスリートのコメントそれぞれにおける、 から に分類されるコメントの割合である。 の優勝も「通過点に過ぎない」と語るなど、現状に満足せず常に課題を見つけ出し、さらに上の目標を意識している、 敗北の悔しさや経験を次の目標へつなげる糧とする、「負けたくない」と「結果」「勝ち」にこだわる、 その競技が「生活の一部」、「好きでたまらない」など、競技に対する強い思い入れがある、「自分のプレー」「自分が納得」できるかどうか、「自分との戦い」

にこだわっている、強敵との対戦を「楽しみ」、苦しい練習や状況を逆に「楽しむ」。そして努力し、頑張ったからこそ「楽しかった」の6つの項目では、個人競技・団体競技でさほど割合に差はなかった。当然のことながら、「チームのために」という意識を持ち試合、練習に取り組んでいる。仲間のミスを責めない。自分のやるべきこと、「役割」を意識しながら試合、練習に臨んでいる、については、個人競技アスリートには語られないコメントである。ここで注目すべきことは、の「チームのために」発言が、団体スポーツアスリートのコメントにおいて21.6%という高い割合を示しているということである。団体スポーツアスリートに「語られる」このコメントについて5.3 語り得ないコメントで、アスリートからの聞き取り調査から述べる。

団体競技アスリートよりも個人競技アスリートに多くみられたコメントとして、技術面の向上だけでなく、「意識」、「モチベーション」、「精神面」の強化を大切にしている、常に「自信」を持ち、プレッシャーに負けない。気持ちの切り替えや、「マイナス」を「プラス」にする発想の転換がうまい、失敗を恐れず「挑戦」したり、あえて厳しい環境に身を置いたりする。「もっと強くなりたい」「やるからにはトップを目指す」、「後悔したくない」、「最後まであきらめない」と妥協は許さず、日々練習、試合に取り組むの4つがあげられる。孤独に戦う個人競技アスリートにとって、「精神面」の強さがより重要になることは予測できる。世界水泳での「相手の顔を見れば『あぁ勝てるな』と分かった」というコメント。ゴルフ部の女子アスリートの「相手のミスで勝とうという気持ちはない。自分で攻めて勝つ」というコメント。フィギュアスケート選手は、「守りに入らず自信を無くしていた高度なジャンプを増やし、あえてプログラムを難易度の高いものに変更した」と試合前語った。あえて「自信」のある強気なコメントをしたり「挑戦」したりすることで、個人競技アスリートは自身にプレッシャーをかける。そのプレッシャーに打ち勝つ精神力が勝利に欠かせない要素と言えるであろう。

このように、個人競技・団体競技という競技形態がアスリートのコメントに影響を与えるといえる。

では、「アスリートのパーソナリティ」もまた、コメントに影響すると言えるだろうか。パーソナリティとは、人格、個性、性格とほぼ同義で、特に個人の統一的・持続的な特性の総体とされている。試合前のインタビューで、同じラグビー部の選手でも、日本代表レベルのアスリートは「目立つプレーでチームに貢献します」とコメント。

また別の選手は「影でチームを支えます」とコメント。この2つのコメントの違いは、単なる選手間の実績、人格の違いで説明できない。パーソナリティは人間行動を説明するための、他者との社会的相互作用で自分の役割を予知しようとするための、一理論とみられている。社会的構築主義において、パーソナリティは人の内面ではなく、人々の間に存在すると考えられる（田中 1997）。つまり、特定の行動、言動をしているのはアスリート自身であり、アスリートの付与するアイデンティティは、その物事態の「特質」よりもアスリートの目的に関係があるのである。よって、パーソナリティ自体がコメント形成に直接影響を与えているというよりもアスリートの行為目的がコメントに影響していると説明できる。

（2）スポーツ・イデオロギー

これらのコメントの分類から、いわゆる「スポーツマンシップ」や「スポーツ・イデオロギー」を感じた。そもそも、「スポーツマンシップ」や「スポーツ・イデオロギー」とはどう説明されるものなのであろうか。

『スポーツ社会学の招待』のなかで『日本のスポーツ制度』を記した日下裕弘は、日本のスポーツ・イデオロギーの発達について以下のように説明する。

スポーツが書生たちの同輩集団によって担われていた明治初期においては、一時的な楽しみを求めただけのハイカラな遊戯にすぎなかった。明治10年代から同20年代初期になると、それまで気軽に行われてきたスポーツがその競争要素を強め、次第に「真面目」なものへと変わった。さらに、書生たちにとっては、スポーツを行うことそれ自体がすでに彼らのプライドであった。

明治20年代から、勝利という明確な目標に向かって集団が一丸となって練習し、プレイする、こうした彼らのスポーツは、単なる自己誇示としての意味を超えて、「人間としての修養」という意味を持ち得るものとなる。

明治20年代から大正初期にかけて形成された上述の「修養・鍛錬主義」的スポーツ信条は、この段階ではまだ、特定個人の信念であるが、あるいは特定集団の信条であるにすぎなかった。それぞれのスポーツ社会にイデオロギーとして公式に表示されたのは、連盟や協会が設立され始めた大正9年頃からである。担い手が修養すべき望ましい精神や態度を象徴する言葉は「運動（家）精神」であった。日本のスポーツはこの「運動（家）精神」を灯涵養することにおいてその存在と発展を正当化されたのである。

理想の運動家は次のような精神的な「徳」を涵養すべきものとされた。以下に示した か

ら までの「武士道」的スポー・モラルは、明治期における野球の担い手、OB そして教育者たちが、その著書や雑誌等の中で、明治以前から伝統的な言葉を用いて掲げている主要な精神徳目を、関連すると思われる群にわけてまとめたものである。かっこ内の言葉は、これらのスポーツ・モラルを表現され得る言葉である。

正々堂々・公明正大の態度に関するもの

(尋常の勝負、堂々と四つ相撲をとれ、敵が倒れたら立ち上がるまで待て、勝ちて驕らず、負けて挫せず、潔い負けっぷり、卑怯・未練をにくむ精神、狭義)

強じんな意志力・忍耐力・克己心

(剛健尚武、日本武士道の気骨、大和民族の意気、臥薪嘗胆、練武鍛勇の業、心胆の練磨、意地をかむ、度胸、武勇)

自制心・規律・服従心

(自己を犠牲にして他を利する、絶対服従、忠なること、不平をいわぬ、礼儀、謙虚、忠実、自重、恭順、礼儀)

協力・共同・団結心

(内の和、一致団結の徳、団体行動、忠誠、縁の下の力もち、本分を守る)

純心さ・潔癖さ

(無邪気、尊さ、清浄、天真、純潔、高潔、純白、純心、汚れのない心)

一所懸命の態度・最善を尽くすこと

(倒れて後止むの精神、魂を打ち込む、我を忘れて没頭する、真摯)

などである。「男らしさ」とは主として、 の資質を、そして「学生らしさ」は主として の資質を強調していた。また、「アマチュア」とは「学生らしさ」とほぼ同義であった。スポーツはまず第一に、こうした「徳の修養の場」として正当化された。さらに、スポーツは、

身体の鍛錬の場

判断力や冷静さを発達させる場

国民の「元気」や「体力」を養うものとして正当化された。

その後、日本人は西欧流の理念である「スポーツマンシップ」や「フェア・プレイ精神」を美化した。だがそれは、日本人が伝統的に有している儒教的な「徳目」や「武士道」的な精神と同類のものとしてすり変えられたのである。

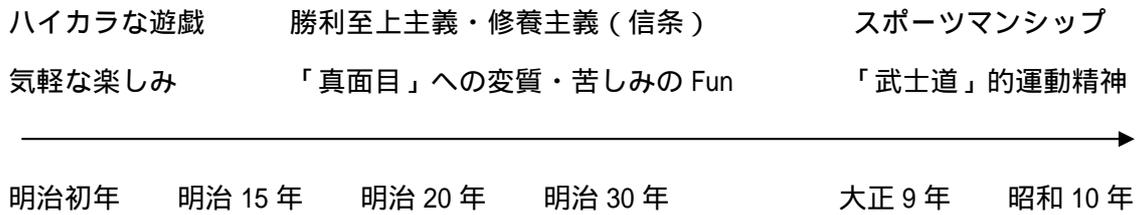


図 3 日本のスポーツ・イデオロギーの発達段階

(2)「武士道」的モラル

精神的なスポーツ・イデオロギーの要素に関しては、その中核に勝利至上主義と修養・鍛錬主義の2つの信条を有する「武士道」的な運動(家)精神として身を結んだ。この「武士道」的モラルを表現した言葉を用いて掲げている主要な精神的徳目を、関連すると思われるいくつかの群に分けてまとめたものに、同志社大学体育会アスリートのコメントを分類したものが以下の表である。

表 3 明治期における「武士道」的モラルとコメントの分類

明治期における「武士道」的モラル	同志社大学体育会コメントタイトルカード
正々堂々・公明正大の態度	優勝も「通過点に過ぎない」と語るなど、現状に満足せず常に課題を見つけ出し、さらに上の目標を意識している。 敗北の悔しさや経験を次の目標へつなげる糧とする。
強じんな意志力・忍耐力・克己心	技術面の向上だけでなく、「意識」、「モチベーション」、「精神面」の強化を大切にしている。 常に「自信」を持ち、プレッシャーに負けない。気持ちの切り替えや、「マイナス」を「プラス」にする発想の転換がうまい。
自制心・規律・犠牲・	「チームのために」という意識を持ち試合、練習に取り組

服従心	んでいる。仲間のミスを責めない。自分のやるべきこと、「役割」を意識しながら試合、練習に臨んでいる。
協力・共同・団結心	「チームのために」という意識を持ち試合、練習に取り組んでいる。責任感が強く仲間のミスを責めない。自分のやるべきこと、「役割」を意識しながら試合、練習に臨んでいる。
純心さ・潔癖さ	
一所懸命の態度・全力を尽くすこと	失敗を恐れず「挑戦」したり、あえて厳しい環境に身を置いたりする。 「もっと強くなりたい」「やるからにはトップを目指す」、「後悔したくない」、「最後まであきらめない」と妥協は許さず、日々練習、試合に取り組む。
身体鍛錬の場	
判断力や冷静さなどを発達させる場	技術面の向上だけでなく、「意識」、「モチベーション」、「精神面」の強化を大切にしている。 常に「自信」を持ち、プレッシャーに負けない。気持ちの切り替えや、「マイナス」を「プラス」にする発想の転換がうまい。
国民の「元気」や「体力」を養うもの	

5 考察

正々堂々・公明正大の態度、 強じんな意志力・忍耐力、 自制心・規律・服従心、 協力・共同・団結力、 一所懸命の態度・最善を尽くす、 判断力や冷静さを発達させる場である、とするスポーツ・イデオロギーは現在でも選手のコメントにみられた。ところが、 純心さ・潔癖さ、 身体の鍛錬の場、 国民の「元気」や「体力」を養うものに分類されるコメントは見られなかった。

また、明治期における「武士道」的スポーツ・モラルに分類できなかったタイトルカー

ドとして、「負けたくない」と「結果」「勝ち」にこだわる、その競技が「生活の一部」、「好きでたまらない」など、競技に対する強い思い入れがある、「自分のプレー」「自分が納得」できるかどうか、「自分との戦い」にこだわっている、強敵との対戦を「楽しみ」、苦しい練習や状況を逆に「楽しむ」。そして努力し、頑張ったからこそ「楽しかった」、の3つがあった。

「負けたくない」と「結果」「勝ち」にこだわる、は「武士道」的スポーツ・モラルの表にはっていないものの、「武士道」的スポーツ・モラルが「勝利至上主義」の信条に含まれるものとする。

聞き取り調査で、インタビューにおけるモラルをアスリートAはこう語る。

「インタビューなんてホンネなんてそんな語ってないでしょうね。日本の社会の中には決まりきった形式的な答え方をしないとバッシングされたり、生意気だと言われる傾向がありますしね」

スポーツ・イデオロギーは今もなおアスリートの中にスポーツ・モラル、つまり「語らなければいけないもの」として息づいているのである。特定の社会、つまりここではスポーツ社会の支配的言説（支配的文化）を今もなお受け継いでいる。これら「武士道」的スポーツ・モラルは、社会規範やイデオロギーを具現する語りに位置づけている。さらに、言語は、たんに事態や出来事の叙述の仕方を伝えるのではなく、人々の動機をつくりだし行為に導く機能をもつため、個人の経験や人生は語りを通じて人々に共有され、社会の経験や歴史に属するようになると先行研究のなかで説明した。語りは普遍的な人間活動あるかのように見えながら、社会生活ではきわめて語りにくい経験があるのである。

5.1 語られないコメント

(1) 純心さ、潔癖さの消失

スポーツにおける「純心さ」、「潔癖さ」とは、「アマチュア」「学生らしさ」の資質である。なかでも、この「純心さ」、「潔癖さ」を忠実に再現しているものが、高校野球といえるであろう。「甲子園のなかにあるのは、若者たちが精神力や根性という言葉に代表された、理想的、伝統的にそうであると信じられてきた日本人への洗礼を体験する姿である」(松田・島崎,1994:40)。高校球児たちは真面目で、謙虚で、健全で、高潔で、清廉で、地道な努力をした結果、甲子園の土を踏むことが出来る。すなわち、甲子園大会は、高潔な高校生祭典とされてきた。それゆえ、高校球児が眉毛を整えるだけで非難されることもあつ

た。大学体育会もまた、「サークル」や「同好会」とは違う、高いスポーツ・モラルが求められる場でもあった。しかし2004年、大学体育会部員による不祥事が多発し、多くの批判が集まった。また、2005年には甲子園常連校や大会優勝校の不祥事があいついで発覚した。暴行、強姦、集団わいせつなど、これらの事件は、「純心さ」「潔癖さ」「高潔」というイメージからはほど遠いものであり、多くのスポーツファンを落胆させた。

それでは、高校球児や大学体育会部員が本当に「純心さ」「潔癖さ」を失ってしまったのだろうか。これは、杉本厚夫がゴフマンの理論を用いつつ、高校球児を「高校野球の選手という役割を演じ、高校生らしく振る舞うことによって、その印象操作をする演技者」としたことによって説明できる。高校球児が甲子園という「場」の力、また観客の力によって、高校生らしいプレイをせざるを得なかったのである。

明治、大正期の運動選手たちは、他者から求められる「純心」「高潔」という言葉を自ら口にし、そして自らその役割を演じることで、自己に一貫性を持たせ、イメージを維持していたのである。

(2) 身体鍛錬の場としてのスポーツ

身体の鍛錬の場、国民の「元気」や「体力」を養うものに関するコメントが消失してしまったことについて考えてみよう。

上述したように、明治10年代から同20年代初期に、書生たちにとっては、スポーツを行うことそれ自体がすでに彼らのプライドであり、自分たちの身分を象徴する意味を持っていた。すなわち、上流階級の子弟として、また選ばれた「学士」としてスポーツを行うこと、その技量に秀でることは、彼らの身体的能力の卓越感を誇示するプライドを満足させた(日下 1990: 116)。現在の大学体育会もまた、高校時代全国レベルで活躍し、プライドを持った選手が集う場でもある。「大学体育会」に所属するアスリートとしてのプライドは、「体育会」を「健全な身体の発達を促し、運動能力や健康で安全な生活を営む能力を育成する会」とはとらえていない。現在「体育」と「スポーツ」は日常語として混同して用いられている。「スポーツ」の概念と、その区別と関連をはっきりさせることは、スポーツ社会学における課題でもあるが、「スポーツ」はすべての人間がなし得るものではなく、「体育」はすべての人間のものであるとするならば、大学体育会アスリートにとって、スポーツは 身体の鍛錬の場、国民の「元気」や「体力」を養うものではない。身体を鍛え、体力をつけ、健康であるというのは、スポーツを行ううえでの目的ではなく、前提であって、あえて発言するものではなくなった。スポーツ、すなわち運動競技活動の目的は

「勝利至上主義」にのっとり、勝負の世界で勝つこと。アスリートたちは、そこで得る絶頂感を求めてスポーツをしているため、身体の鍛錬の場、国民の「元気」や「体力」を養うものに関するコメントが消失してしまったのであろう。

5.2 語られるコメント

(1) 「自分のプレイ」

「全体的に調子は悪くない。気持ちを緩めず、しっかりと自分のゴルフをしていきたい」全英女子オープンに向け語った宮里藍選手。「最終的にはアシストという形が付いたけども、まだまだこの試合ではチームに馴染んでいなかったし自分らしいプレーもほとんど出せなかった」と、中田英寿選手。「どんな状況でも自分のパフォーマンスをしなくちゃいけません」と、200本安打を達成し語ったイチロー選手は語る。

近年プロからアマチュアの選手の間で聞かれるようになった「自分のプレー」という言葉。聞き取り調査で選手Aは「自分のプレー」についてこう語る。

「練習や試合の中で、1番よかったプレーを常に基準においている。相手との駆け引きにおいて、先手先手で勝負し、自分の思い通りになることが自分のプレーかな」。

また、選手Bは次のように語った。

「自分のピッチングとか使ってるんやけど、自分で言っても説明してとか言われたらよくわからん」。

きっとすべての選手が「自分のプレー」「自分らしさ」について語ることは困難であろう。「自分らしさ」や「ほんとうの自分」もまた他者に向けて特定の演技を行うことによってのみ産み出され、維持されるような自己アイデンティティの一つであり、それ自体がもうひとつの役割なのである（桜井 2001）。

(2) スポーツにおける「楽しさ」

明治、大正時代。スポーツは「真面目」なものとしてそれに没頭することが前提にならなければならなかった。もちろん、担い手たちはスポーツによって得られる楽しみを否定したわけではなかった。動くこと、技を競い合うこと、スポーツを行うことそれ自体は、単純に「楽しかった」のである。しかし、当時の社会にあっては、こうした「ホンネ」が彼らのスポーツを正当化することはできなかった。彼らのスポーツを正当化する理論は、「修養」という社会的な意味づけによって発達した。スポーツに没頭し、「吐血練習」に耐

え、勝利の絶頂的喜悦を知っていた担い手たちにとって、こうした「修養」は二次的な意味をもつ、一種の「タテマエ」でさえあった。(菅原 1990 118)

このように、スポーツが「修養主義」として意味づけられていた時代、「楽しみ」という言葉は決して「語り得ない」ものであった。

ところが、1996年のアトランタ・オリンピックで「楽しみ」にかかわる発言が頻繁に報道された。しかし、競技後の報道では、結果が思わしくなかったこともあり、この「楽しみ」にかかわる発言には批判が集まった。

村田 雅之は『「楽しみ」という「言葉」——スポーツに関する発言の社会学』(スポーツ社会学研究 8 2000)の中で、「楽しみ」というメッセージの意味を以下の4つに類型し「楽しみ」に関する言葉の流通と、それに伴う違和感について説明した。

加熱 「勝つ楽しさを味わえ」「勝つ楽しさを味わいたい」

沈静 「勝利のためうまくリラックスしたい」

代替 「この経験を通して成長したい」「人生を豊かなものにしたい」

冷却 「気楽にやれよ」「気楽にやりたい」

すべてのケースの「楽しめ」をこの類型に厳密に分類することはできないが、このように「楽しめ」「楽しみたい」という言葉には多様な意味がありうるということが分かった。その上でメッセージのやりとり、つまり競技者と周囲(メディア)が共同で関係を維持する過程に焦点を合わせて村田は考察する。

「楽しめ」は日常的な語感では、「加熱」よりも、残りの3パタンの意味合いのほうが一般的に響くであろう。また、ここで気をつけるべきことは、この「加熱」のメッセージが近年風潮として嫌われており、「タテマエ」上は言いにくい状況があるということである。多様な意味のどれに該当するかを曖昧にしたまま、競技者自身の感情(楽しさ)を大事にしているように装いつつ、「プレッシャーを減らそうとする善意と、結果で評価しない優しさを持つ自分」というセルフイメージを守ることさえできる、実に便利なツールなのである。メッセージの二重性に込められたホンネとタテマエ。勝利への過大な期待をかけていないふりをするメディアと、受けていないふりをする競技者は、共同で一つの「よい関係」ドラマを構成することになる(村田 2000)。

このように、メディア(インタビュアー)からアスリートへの「楽しめ」という姿勢が、ホンネではよい結果への期待を含むこと。逆に、アスリートからメディア(インタビュアー)への「楽しみたい」という言葉は、試合に勝利したときには「大舞台でもいつもの力

を出し切った」「無欲の勝利」など、歓迎されるものである。しかし、敗北したときには「試合は遊びではない」、「プレッシャーから逃げる精神的な弱さ」など批判されるものである。「楽しめ」「楽しみたい」という言葉のコミュニケーションは、アスリートと周囲（インタビュアー・メディア）との間で保たれる関係のドラマなのである。

明治、大正時代、競技スポーツは、努力に伴う苦痛と、それを乗り越えた者に与えられる栄光、という物語こそふさわしいとされていた時代。スポーツは、楽しいとか楽しくないとかの軸で語られるべきものではないとされた。語り得なかった「楽しみ」にかかわるコメントも、スポーツの社会的な意味づけ、競技者と周囲の関係の変化により、今日多くの場面で聞かれるようになった。このように、スポーツをとりまく社会の変化によって、「語り得ない」もまた、常に変化し続けているのである。

聞き取り調査のなかでアスリート A は、スポーツにおける「楽しみ」について次のように語った。

「やっぱ本当に楽しいと思うことはありますよ。僕は、スポーツは人に見せるもので、人を驚かせたり、感動を与えたりするものだと思う。人を驚かせること、人に見られていることは本当に楽しいですよ。スポーツマンなんてみんなカッコつけやし、きっと自分が一番好きやと思います。自分は、こんなにすごいことができるんだってところをみんなに見て欲しい」。

また、プレッシャーを楽しむことについては次のように語る。

「プレッシャー自体を楽しむことは難しいですね。けど、プレッシャーとか緊張のない試合は本当におもしろくないです。大舞台での緊張は本当に苦しい。でもプレッシャーをはねのけたときの感覚はたまらないですよ。本当に」。

(3) 勝利の喜び

アテネオリンピックで、金メダルを獲得した水泳の北島康介選手の「超きもちいい」という言葉は、まさに苦しい練習を経た上での勝利の絶頂感のなかでのコメントであろう。

「負けることがどれだけ辛いのか。勝つことがどれだけ嬉しいのか。それを知っている」

「やっぱり一番は気持ちいい」

「試合で勝利の喜びを知ったときから、常にトップを目指そうという思いでやっている」

「優勝・・・ほんと最高ですね」

上記の大学体育会アスリートのコメントは、負けることの辛さ、壁を乗り越えることや勝利することの喜びを知っている。また努力は報われるということを知っている、に分類される。このコメントは新しく生まれたものではなく、明治20年代のスポーツ信条のひとつである〈苦しみのFun〉で説明されている。

勝利という目標に向かって集団が一丸となって練習し、プレイする、こうしたスポーツはもはや、単なる自己誇示として意味を超えて、「人間としての修養」という意味を持ち得るものとなる。一時の気晴らしや「いちゃついた」スポーツ実践からは、「修養」の意味は付与されない。スポーツは担い手の意識の深い層までに「自我関与」されたのである。スポーツを深く内面化し、醍醐味を知ったとき、苦しい練習体験も「表面的なおもしろさ」とは質の異なるより深い、Fun体験の一局面となる。「勝利」と「修養」という2つの信条を中核にもつ、「堅苦しく」さえ思えるスポーツ、当時の担い手にとってはそうしたスポーツがおもしろかったのである(日下 1990)。つまり、負けることの辛さ、壁を乗り越えることや勝利することの喜びを知っている。また努力は報われるということを知っている、は明治期にすでに生まれたスポーツ信条だったのである。しかしながら、プレーヤーの意識においては常に勝利至上主義的なスポーツ信条が優先していた。実際、ともすると弊害を起こしがちであった彼らのスポーツに「修養」の意味を付与したのは、彼らの身近にあってスポーツに理解を示した教育者たちや、現役時代に勝利を求めてスポーツに熱中したOBたちであった(日下 1990)。

5.3 語り得ないコメント

世界のトップアスリート称されるイチローはインタビューについてこう語る。

「聞いている側にとって、ちょっと聞き苦しいことをいいたしたら、それは本音ですよ。そして、さらにそれを超えれば、本当の評価につながります」(2005)

以下に記したものは、インタビューでは語られない、聞き取り調査の中で語られたアスリートたちのコメントである。

「『チームのために』ってコメントは、いい人ぶってるだけ。謙虚に見せてる。やっぱ自分が目立ちたいんやけど、そこは謙虚にいつかんと。チームメイトのエラーもインタビューとかでは責めんけど、試合の後、本人に対してむっちゃ怒る。」

「キャプテンやから、チームの評価が自分の評価につながる。結局みんな自分が目立ちたいやろうし、自分が評価されたいと思ってる。」

「正直なところ団体戦は嫌いです。僕は自分自身を評価してほしいのに、それをしてもらえないからおもしろくない。僕が活躍して、むっちゃ頑張ったら勝てるならやる気まんまんになりますけど、正直気持ちのがのってきません。やる気のないチームでやることには正直戸惑いも感じます。団体戦で 10 点差あいてまわってくると正直無理です。自分のミスじゃないのにこんな差ついてたらモチベーションも下がります」

これらのコメントは、一所懸命の態度・全力を尽くすこと、自制心・規律・犠牲・服従心、協力・共同・団結心という日本のスポーツ・イデオロギーを否定するものである。

「10 点差でまわってきた場面でも、A は最後まであきらめず、チームメイトのために全力を尽くした」というお決まりのドラマはこのコメントにより一気に崩れたのだ。

私たちインタビュアーは、アスリートのホンネが知りたい。しかし、そのホンネは、一般に「使えない」コメントであり、これから作ろうとしているドラマを一気に崩壊させ得るものなのである。ライフストーリーインタビューにおいても、調査者は、語り手が語ったライフストーリーを、彼/彼女が実際に体験した出来事や事実であると単純に信じるほど素朴な感覚の持ち主でもヒューマニストでもない。(桜井 2002) スポーツインタビューにおいても同じである。私たちインタビュアーもまた、調査対象者 (= アスリート) がすべてホンネを語っていないことを知っているのである。

「9 回の裏、満塁とかピンチの場面、ほんまは心のなかで『うわぁやべえどうしょ～やっべえ』とか 1 人で思ってる。けど、そのときも顔には出さずに、インタビューでも「ただ抑えることだけを考えていました」って言う。これはインタビュー用のコメントやな」

「僕は同志社のなかで一番インタビューに慣れているし、インタビューに答えるのがうまいと思いますよ。インタビューのときには、言って(インタビュアーが)喜びそうなコメントを言います。インタビュアーが言わせようとする前に、先に気づいて言ってあげます。相手がまだ記事のイメージとはまとまってなさそうだったらこっちから作ってあげますよ」

アスリートたちもまた、インタビューが共犯関係にあることに気づいているのだ。つまり、イチロー選手のいう「ちょっと聞き苦しいこと」こそ、選手たちの「語り得ない」ことなのであろう。

5.3 おわりに

「観客に感動を与えるプレーを見せます」

「観客の印象に残る、自分にしか出来ない演技を披露したい」

「テニスは見ている人や相手に伝えられるものがある」

これらのアスリートの言葉から、「自分のプレーを多くの人に見てもらい、感動を与えたい」という気持ちをもちプレーしていることを感じる。そして、私たちインタビュアーもまた、「スポーツにおける感動を伝えたい」という想いをもち、スポーツ新聞編集の活動をしている。「試合を感動の物語り(ドラマ)」として多くのひとに伝えるという共通の目標に向かって、「インタビュー」という状況でインタビュアーも選手もお互いの役割を演じあっていたのだ。

アスリートは「語り得ない」ものを隠蔽し、一貫性を演出するエピソードを選びだし、インタビュアーに語る。語られたインタビューコメントはメモとして記録される。この時点で、インタビュアーはこれから記事を書くという行為に必要なコメントを、無意識のうちに取舍選択していることになる。そして、新聞記事として、他者の目に触れるときには、さらに「編集」され、「構成」されるのである。この<変換のプロセス>(小林1995)を経て初めて、物語(ドラマ)は完結するのである。

この共犯関係こそが、アスリートが隠蔽している「語り得ない」ものをさらに隠蔽し、ドラマを作り出すために欠かせないものとなっている。

私たちが共犯関係により作り出した物語(ドラマ)は、私たちだけの間で完結するものではないことを、忘れてはならない。時間軸を延長させてみると、インタビューという相互作用の中で、アスリートにとっての他者はインタビュアーだけではない。同様に、インタビュアーにとってもアスリートだけが他者ではない。インタビューコメントが「選択」され、「構成」され、新聞記事になり、その先の未来まで予兆する性質を得、読み手という新たな他者も存在し得るのだ。

Gergen は、心理的な言説は「内的社会の正確な記述」ではなく「パフォーマンスティヴ(遂行的)」なものであるとする。「何かを言う」ということはまさにそのことによって、私たちは特定の関係の中で特定のパフォーマンスを行っているのである。そして、人間の発達は、ある方向やゴールに向かって進んでいくと想定される。スポーツにおける言説もまた同様である。

最後に、18歳という若さでアテネオリンピックに出場したものの、惜敗を喫した選手の

記事を、著者は以下のように記した。

「精神力の弱さが最大の敗因」と、悔しさをにじませた。

しかし、A がアテネの地で学んだものは計り知れない。世界の壁の厳しさ。自己の精神力の弱さ。そして、世界のトップアスリートが集う、最高の舞台の感触。「世界」を肌で感じられたことに大きな価値があった。

日本中がメダルラッシュに沸く中、A は帰国した。「いつまでも悔しい悔しい言ってもらえない。次こそメダル取ります」。力強く語る若き剣士のまなざしは、まっすぐに4年後の北京を見据える。

「語り得ない」ものを前提とするインタビュアーとアスリートの共犯関係は、ただ物語りに一貫性を持たせるだけでなく、未来を予兆するものとなり得るのである。

参考文献・引用文献

- 浅野智彦,2001,『自己への物語論的接近 家族療法から社会学』勁草書房.
- Kenneth Gergen,2004,『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.
- 桜井厚,2002,『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 小林多寿子,1995,「インタビューからライフヒストリーへ 語られた『人生』と構成された『人生』」中野卓・桜井厚『ライフヒストリーの社会学』弘文堂 43-70.
- 森川貞夫,1980,『スポーツ社会学』青木書店.
- 松田恵示・島崎仁,1994,「甲子園と奇跡」,江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学』,世界思想者.
- 菅原禮,1984,『体育とスポーツ社会学』不昧堂出版.
- 杉本厚夫,1994,「劇場としての甲子園」,江刺正吾・小椋博編,『高校野球の社会学』
- 日下裕弘,1990,「日本のスポーツ制度 成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究」菅原禮『スポーツ社会学への招待』不昧堂出版 101-135.
- 『夢をつかむイチロー262のメッセージ』編集委員会,2005,『夢をつかむイチロー262のメッセージ』ぴあ.
- 高井昌史,2001,「メディアの中のスポーツと視聴者の意味付与 高校野球を事例として」『スポーツ社会学研究』9:94-105.

村田雅之,2000,「「楽しみ」という「言葉」 スポーツに関する発言の社会学」『スポーツ社会学研究』8:50-59.

(40字×30字)本文25ページ400字詰め原稿用紙:51枚

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけでな 持ちブ ム」「仲 恐れず 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわ 「勝ち」 に対する強 プレー」 戦を「楽 しむ」 喜びを
指す げる 面、強化 シャーに 割」意識 する ない こだわ い思い にこだわ る 知っている

2	「日本一にこだわる」																			
	「(関西)リーグ優勝はあくまでも通過点」																			
	「練習の苦しさを、次につながる楽しみに変える」																			
	「野球に取り組む姿勢を、まず自分が体で示す」																			
	「いいプレーをする人がいれば、年に関係なく吸収していく」																			
	「チームを支えるだけでなく、レベルを高めていきたい」																			
	「試合で結果をださなければ意味がない」																			
	「勝つことを意識しすぎず楽しくやるだけ」																			
	「野球に関する知識の勉強、研究を徹底している」																			
	「チームの勝ちを優先する。チームにとって何が一番重要なのか、それを常に考え打席に立っている」																			
	「最後はとにかく楽しんでやりたい」																			
	(サヨナラ勝ちのあと)「初めから負ける気がなかった」																			
	「格上相手にも、自分たちの野球ができればチャンスがある」																			
	「努力する才能を授かった」																			
	「PL学園で礼儀、あいさつなど今の野球人生にかかわるすべてを学んだ」																			
	「試合に出れない悔しさを味わったからこそグラウンドに立てる喜びを知っている」																			
	「グラウンドに立てば殺気立ってもいい。遠慮するやつはいらない」																			
	「チームに勝ちにこだわる意識を植え付ける」																			
	「自分たちの野球とは何なのか?について何時間もミーティングする」																			
	「今は前向きに楽しくやるだけ」																			
	「負けることがどれだけ辛いのか、勝つことがどれだけ嬉しいのか、それを知っている」																			
	(引退試合、惜敗に悔し涙を流しながら)「やることをやった4年間に悔いはない」																			
	「気持ちの甘えをなくすことが大切」																			
	「誰よりも野球を知っている自信を持ってプレーしている」																			
	「積極的に仕掛ける野球を逆にやられた」																			
	「キャプテンとしてチームを勝つ集団に変えてゆくのは簡単なことではないが、楽しみでもある」																			
	「盗塁など一つ一つのプレーをこつこつ重ねることが自分にできること」																			

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」 対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
ず上を 次につな なく「精 シャーに 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわ い思い にこだわ しむ、 知っている
指す げる 面」強化 レッ 割」意識 する ない 入れ る る

4	「前の大会で味わった屈辱をエネルギーに変え、アジア選手権で優勝する」																	
	「イアン・ソープとの対戦で、世界の壁を痛感し、『泳ぐ』ことに対する意識から変えた」																	
	「世界とも差」を自ら感じるためにイアンソープの所属する豪州チームに留学し、練習に取り組む。																	
	「世界のトップもどんどんレベルを上げてきている。もっと強くならなければ」																	
	(レース前)「いける」と自信満々に語る																	
	「相手の顔を見れば『あぁ勝てるな』と分かった」																	
	(日本記録を出した後の試合で惨敗したとき)「(日本一という)プレッシャーはなかった。次は絶対に勝てる。自信はある。」																	
	(イアンソープに対して)「同じ年で自分よりも強いやつがいるなんて気に入らない。」																	
	「世界のファイナリストであるという自信がある」																	
	「世界レベルの技術を勉強したい」と留学																	
	「去年の世界水泳よりどれくらい成長したのか、今は泳ぐのが楽しみ」																	
	「金をとれたのはうれしかった。でも記録も欲しかった」																	
	「記録を破るための『壁』は自分自身のなかにある」																	
	「自分の中の壁は、自分の信念で打ち破る」																	
	「技術よりも気持ちの持ちよう」																	
	(日本選手権優勝)「うれしい気持ちと悔しい気持ち。出来は80パーセント」																	
	「水泳をやりたいからやるし、やるからにはトップを目指す」																	
	(六甲山に数日間こもり)「集中力や気持ちのコントロールが出来るようになった」																	
	「結果に関係なく、気持ちよく泳げれば良いと思うようになった」																	
	「調子が悪かったので、泳ぐ前から好結果が予想できなかった」																	
	「技術面よりも本当の意味で楽しく泳ぐことを教わった」																	
	「自分が出来ると思ったことは出来る。自分に負けないように。」																	

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
敗北を糧とし、次につなげる
技術面だけでなく「精神面」強化
「自信」を持ちブレッシュに負けない
「チーム」仲間「役割」意識
失敗を恐れず「挑戦」する
向上心を持ち妥協を許さない
「結果」「勝ち」にこだわらない
競技に対する強い思い入れ
「自分のプレー」にこだわる
練習、対戦を「楽しむ」、知っている
勝利の喜びを知っている

6	「絶対に8メートル10飛ぶ。自信がある」																		
	「目標は自分に勝ち、自己新記録を出すことだけ」																		
	(関西で優勝しても)「試合内容に満足できない。技術面での課題がまだまだ残っている」																		
	「自分を出せば絶対に勝てる」																		
	(初の国際大会で)「勉強会のつもりで、高度な技術をできる限り取得しよう」																		
	(全日本選手権2位)「悔しい。これをばねに世界で注目される選手になりたい」																		
	「自分との、記録との戦い」																		
(関西選手権4連覇も)「照準は日本選手権に合わせている」																			
7	「どのチームよりも練習したので絶対勝てる自信があった」																		
	「技術面の強化よりも精神面の強化が大事」																		
	(日本一になっても)「もっともっと強くなりたい」																		
	(最終セットを迎えたとき)「勝つことしか頭になかった」																		
	(格上の選手との対戦のとき)「気持ちで負けるわけにはいかない」																		
	自分が苦しいときも「大丈夫」「頑張ろうや」とチームメイトに声をかける																		
	「調子の悪い選手がいることはしょうがない。その分仲間が取り返す」																		
	「昨年負けて味わった悔しさを力に変えた」																		
	「ピンチだと感じたことはなかった。お互いを信じていたから」																		
	「実力を出せば絶対優勝できる」																		
「チームの人数が少ないという弱みを、一人ひとりの意識が高いという強みと考えている」																			
(チームメイトがケガしたとき)「部員のために絶対勝つ」																			

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」「仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」に 対する強 プレー」 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわ り思い にこだわ しむ」 知っている
指す げる 面、強化 シャーに 割、意識 する ない 入れ る

8	(3連投の後も)「しんどくなかった。野球を楽しんでやってきたので、これまで一度もしんどいと思ったことはない」															
	「苦むために野球をやっているのではない。楽しむことを一番にやっている」															
	「チームのためにも全力で投げる」															
	「空振り三振を取ることが快感」															
	「故障中のトレーニングなど苦しい日々があったからこそ今の自分がある」															
	「仲間のために俺が決める」															
	「立命に負けた色々な経験で、秋につなげるピッチングをします」															
	「エースとして自分が引っ張っていかなければ」															
	「悔しい負け試合をできたことはいい経験になった」															
	(負けたときも)「気持ちでは絶対に負けていなかった。次は絶対勝ちます」															
	「自分の記録のためではなくチームが勝つためのピッチングをするだけ」															
	(優勝決定戦でも)「固くならず、開き直って挑もう」															
	(完全試合達成後)「これだけの投球が出来たのは(捕手の)桑原や野手がバックで守ってくれているおかげ」															
	「大学では努力は決して裏切らないということを学びました。本当に一步一步の日々でした」															
	「将来より今はただ精一杯やるだけです」															
「記録は意識していない」																
「調子の悪いときこそ自信のあるストレートを投げる。変化球だと悔いが残る」																

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」「仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」 に対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわる い思い にこだわ しむ、 知っている
指す げる 面」強化 シャーに 割、意識 する ない 入れ る する

9	「自分たちの100パーセントの力を出すことが一番大切」													
	「大差で勝ったからといって満足するようでは駄目」													
	「ラグビーは気持ちがすべて」													
	「少しでも長い時間ボールに触れていたい」													
	「必ずこの負けは次につながる」													
	「目標はあくまで早稲田と関東学院」													
	「キックは誰にも負けない」													
	「ケガも実力のうち。今出来ることをやるだけ」													
	「納得したらそこで終わり。常に課題を見つけ、それに向けて取り組む」													
	「『楽な道を行くな。遠回りしてもいいから厳しい道を行け』」													
	「一日一日を大切に、試合ごとに成長したい」													
	「相手が誰であろうと自分たちのラグビーをするだけ」													
	「日本一になるために、決して妥協はしない」													

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す	敗北を糧とし、次に上げる	技術面だけでなく「精神面強化	「自信」持ちブレッシュに負けない	「チーム」仲間「役割」意識	失敗を恐れず「挑戦」する	向上心持ち妥協を許さない	「結果」「勝ち」にこだわらない	競技に「自分の強い思い入れ	「自分のプレー」にこだわる	練習、対戦を「楽しむ」	勝利の喜びを知っている
--------------	--------------	----------------	------------------	---------------	--------------	--------------	-----------------	---------------	---------------	-------------	-------------

10	「『自分たちのラグビー』をチームとして突き詰めれてないことが敗因」												
	(早大、関東学院に対しても)「日本一になるための過程にすぎない」												
	「負けたのは技術面・体力面が原因ではない。意識の問題」												
	「今までの自分たちを一度すべて否定された」												
	「相手が誰であろうと関係ない」												
	「ラグビーに取り組む気持ち、プレーに挑む『気持ち』を強くしよう」												
	「ベストは尽くせた。負けたのは残念だがああいうラグビーが出来るとわかったのは大きな財産」												
	「主将として勝つためのプレッシャーはあるが、チーム作りは楽しい」												
	「関西3連覇は日本一への通過点に過ぎない」												
	「最終学年として、1人のラグビー部員として悔いを残したくない」												
	「チーム力が上がっている。大学選手権が楽しみ」												
	「プレーで引っ張る。そうすれば自然と部員はついてきてくれる」												
	「観客に感動を与えるプレーを見せます」												
	「練習の手ごたえは試合中に感じている」												
	「ケガで本当に悔しい思いをしたし、ラグビーがしたくてしたくてたまらなかった」												
	「点数にこだわらず、一つ一つのプレーにこだわった」												
	「試合でも練習でもまだやさしい部分がある。もっと貪欲にいかないと」												
	「一日練習をミーティングにして、初めて今までを振り返って冷静に分析できた」												
	「自分たちの継続ラグビーをする気持ちを強く持って試合に挑む」												
	「練習、筋力トレーニングも今までと同じことをしていても絶対勝てない」												
	「もうどこにも負けない。それが最終目標」												

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
敗北を糧とし、次に繋げる
技術面だけでなく「精神面」強化
「自信」を持ちブレッシュアーに負けない
「チーム」「仲間」「役割」意識
失敗を恐れず「挑戦」する
向上心を持ち妥協を許さない
「結果」「勝ち」にこだわらない
競技に「対する強い思い」を入れる
「自分のプレー」にこだわる
練習、対戦を「楽しむ」
勝利の喜びを知っている

11	「早稲田戦ノーサイドの瞬間はVTRを見なくても頭にしっかり刻まれている」																
	「やりたいことをやらせてもらえなかったことが悔しい」																
	「もう負けたくない。次は絶対に勝つ」																
	「勝ちたい気持ちが年々強くなっている」																
	「目立つプレーをします。派手なプレーでチームに貢献したい」																
	「プレッシャーはプラスに考える」																
	「負けたことは悔しいが、この試合は必ず来年につながる」																
12	「自分とスケートは切り離せない」																
	「しんどいときも笑顔。人に見せるスポーツだから」																
	「今の自分がいるのは支えてくれるみんなのおかげ」																
	「観客の印象に残る、自分には出来ない演技を披露したい」																
13	「ピッチャーの不調も捕手である自分の責任です」																
	「明るいチーム。だからこそ気のゆるみが出る」																
	「たとえ相手が強豪でも気持ちで負けるわけにはいかない」																
	「技術の問題ではない。想いの強さが大切」																
	「野球の怖さを感じ、いい経験になった」																
	「人は人。常にライバルは自分」																
	「野球がいつも隣にあるのが普通の環境だった」																
	「原点に戻り、新たな気持ちでリーグ戦に挑む」																
	「今まで一緒に戦ってきた仲間のためにもここで終わるわけにはいかない」																
	「最後は自分の配球ミスです。(打たれたピッチャー)は本当によく投げしてくれました」																
	「大事なものは負けたら終わりというところで、ここまでやれたこと。必ずこの経験は秋につながる」																
	「ここまで来たら今まで自分たちがやってきたことを信じて戦うしかない」																
	「みんなよくやった。エラーはせめられない。」																
	「練習は裏切らない。努力したぶん自分に返ってくる」																

選手

インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す	敗北を糧とし、次につなげる	技術面だけでなく「精神面」強化	「自信」持ちブレッシングに負けない	「チーム」「仲間」「役割」意識	失敗を恐れず「挑戦」する	向上心持ち妥協を許さない	「結果」「勝ち」にこだわらない	競技に対する強い思い入れ	「自分のプレー」にこだわる	練習、対戦を「楽しむ」	勝利の喜びを知っている
--------------	---------------	-----------------	-------------------	-----------------	--------------	--------------	-----------------	--------------	---------------	-------------	-------------

14	(最後の大会の前)「燃え尽きてやろう」																			
	「自分の走りができた。やり残したことはない」																			
	「いい結果だとは思うけど、もっといい結果が狙えた」																			
	「馬が調子いいときだけ結果だせるんじゃない」																			
	「結果的に優勝したけれど、まだまだ直さなきゃいけないところがたくさんある」																			
	「シルバーブラネットに乗って負けるわけにはいかない」																			
	「シルバーブラネットに乗るプレッシャーには負けない自信がある」																			
	「まだ上の順位を狙いえるチャンスがある。最高の走行をしよう」																			
	「結果に納得している。でもまだ良くなるはず」																			
	「もう、悔しい思いはしたくない」																			
	「人間がもっと成長して、馬を助けたい」																			
	(初日1位通過しても)「去年の経験を生かし、2位とは大差があるけど気を引き締めていこう」																			
	「選抜の優勝は悔いが残って素直に喜べない」																			
	「優勝の可能性がなくなり集中力が切れた」																			
	「関西で出せた力を出すことが出来なかった」																			
	「馬に乗って飛んでいるときは最高に気持ちがいい」																			
	「油断した。慢心もあった」																			
	(引退後)「本当にこの4年間ほんとに楽しかった」																			

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけでな 持ちブ ム」仲 恐れず 持ち受 「勝ち」 に対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 」「挑戦 協を許さ こだわ い思い にこだわ しむ、 知っている
指す げる 面」強化 シャーに 割」意識 する ない 入れ る

15	「自分たちのやらなきゃいけないことをやらな																	
	「負けて悔しい。けど勉強になった」																	
	「まだ先の話なので何も考えていない。まずは関西を1位で通過することだけ」																	
	「常に自分たちのホッケーをしないと」																	
	「勝つしかない。100パーセントで攻めていく」																	
	「楽しみながらホッケーをして、その結果を楽しむ。それがホッケーの原点」																	
	(ペナルティが続きメンバーが6人対3人というピンチの場面でも)「めったにない場面やし逆に楽しもう」																	
	「相手に攻められている状況でも自分たちのやるべきことをやるだけ」																	
	「勝ちます。それしかない」																	
	「力の差はない。秋に勝てればいい」																	
	「1年生に今のうちにどれだけ未熟かを実感させたい」																	
	「勝敗にはこだわらない」																	
	「自信？ありましたよ」																	
	「負けるっていうことにはそれなりの原因がある。そこを直して次やれば当然勝てますよ」																	
	「引き分けでもいいという気持ちはない」																	

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」「仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」 に対する強 プレー」 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 「挑戦」 協を許さ こだわる い思い にこだわ しむ」 知っている
指す げる 面、強化 シャーに 割、意識 する ない 入れ る

16	「試合で同志社ラクロスを見せたい」													
	「どこよりも練習やってきたので自信があった」													
	「どこよりも勝ちたい！という気持ちが強かった」													
	「3ヶ月間ずっと頭には関学戦がある。関学に勝って関西制覇しないと意味がない」													
	「悔しい気持ちを次につなげたい」													
	「4年間ラクロスやって頑張れば頑張るほど努力がむくわれた。頑張ったから楽しかった」													
	「社会人になって、ラクロスを続けることが何になるかは分からないが、それでもラクロスをやりたい」													
	「いいチームに出会えた。いい仲間がいた。それで4年間やってこれた」													
	(後輩に)「この悔しさをバネに強い同志社を作ってほしい」													
17	「人に勝っただけじゃだめ。ライバルは最後は自分」													
	「チームのためのプレー、ミーティングでの発言を心がけている」													
	「人の100倍練習して、もっとうまくなりたい」													
	「相手が強ければ強いほどラクロスが楽しい」													
	「練習でできないことは試合でもできない」													
	「結局最後は技術うんぬんじゃなくてモチベーションの問題」													

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す 敗北を糧とし、次につなげる 技術面だけでなく「精神面」強化 「自信」持ちブレッシャーに負けない 「チーム」「仲間」「役割」意識 失敗を恐れず「挑戦」する 向上心持ち妥協を許さない 「結果」「勝ち」にこだわらない 競技に対する強い思い入れ 「自分のプレー」にこだわる 練習、対戦を「楽しむ」、知っている

18	「自分はまだまだエースとは言えない」															
	「すべては自分の責任」															
	「優勝できなかったことが何より悔しい」															
	「とにかく優勝したい。それだけが目標」															
	「自分がこれだけ勝てればチームは優勝できる」															
	「緊張はしない」															
	「ガッツポーズは勝ちたい気持ちの表れ」															
	(リーグ戦優勝し)「最高ですね・・・」															
	「自分が投げる試合は全部勝つ。それがチームのために出来ること」															
	「大学生活で最高のピッチングをする」															
	「相手が誰でも全く意識していない。とにかく相手を押さえることが自分の役目です」															
	「ここまできたら技術面ではなくメンタル面の強化に取り組む」															
	「最終回の1点は、明日のための気合を入れなおすいい薬になった」															
19	「あの勝ちは本当に大きかった。『自分たちの野球が出来れば勝てる』という自信になった」															
	「近大に勝てたのは大きい。これからもひとつずつ勝っていく」															
	「チームがひとつになって戦うしかない」															
	「あきらめずにチームがひとつになって戦ってきた」															
	「個人の結果なんてどうでもいい」															
	「うちの泥臭い野球でも勝てることを証明したい」															

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけでな 持ちブ ム」「仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」に 対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな ぐ「精神 レッ 間」「役 」「挑戦、 協を許さ こだわる い思い にこだわ しむ、 知っている
指す げる 面」強化 シャーに 割」意識 する ない 入れ る

26	「『負けて残念』では終わらせない。チームのために必ず勝つ」												
	「いつもまわりに支えられている。感謝している」												
	「後輩に優勝の経験をさせてやりたい」												
	「負ける気がしなかった」												
	「1人で野球はできない」												
	「今野球ができる環境に、ここにいるみんなに感謝したい」												
	「みんなでやっているから勝つことは簡単じゃない。でも勝ったときの喜びはその分大きい」												
27	「期待に応えられなかった」												
	「ライバルはいない。最後は自分との戦い」												
	(全日本優勝)「世界への通過点に過ぎない」												
	「優勝を意識しすぎた」												
	「初日は緊張した」												
	「勝つべくして勝った」												
	「一つの目標に向かって全員で頑張ってきた過程を誇りたい」												
	「支えてくれたみんなの分まで走った」												
	「何よりも仲間のありがたさを感じた」												
	「最後まで絶対あきらめなかった」												
「相手のペースに合わせず、自分のペースで自分に勝つ」													
「1位以外は負けや絶対優勝する」													
(全日本選手権前)「負ける気がしなかった」													

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
敗北を糧とし、次に上げる
技術面だけでなく「精神面」強化
「自信」持ちブレッシャーに負けない
「チーム」仲間「役割」意識
失敗を恐れず「挑戦」する
向上心持ち妥協を許さない
「結果」「勝ち」にこだわらない
競技に対する強い思い入れ
「自分のプレー」「戦を楽しむ」にこだわる
練習、対戦を「楽しむ」、知っている

28	「内容よりも勝ちにこだわった」																		
	「粘り強さと相手の技をさばくことが必要」																		
	「気持ちだけでは上のレベルに通用しない」																		
29	「負けてたまるか、という気持ちで勝とう」																		
	「死ぬ気で練習をする。それは必ず自信につながる」																		
30	「日の丸をつけることは自信になる」																		
	「日本代表として戦うプレッシャーはあるが気持ちがいい」																		
	(中国との対戦後)「このままでは勝てない。もっと練習しないと」																		
	「上にいくためには技術面だけでなく精神面の強化が必要」																		
	「試合で勝利の喜びを知ったときから、常にトップを目指そうという思いでやっている」																		
	「適当にはやりたくない。やるからには一番になりたい」																		
	「卓球をやめようと思ったことはある。でも好きだから踏みとどまる」																		
	「卓球の、相手との駆け引きは本当におもしろい」																		
	「負けた悔しさも、すべての経験は糧になる」																		
	「常にノートを持ち歩き、自分へのアドバイス、相手のデータを書きとめ、次の試合の修正に役立っている」																		
	「卓球が好きだから、最後までやりきる」																		
	「まずは日本一。1つずつ達成し、世界を目指す」																		
	「世界トップ選手との試合は今後の糧になった」																		
31	「目標は達成できなかったけど、悔いはないから」																		
	「テニスは見ている人や相手に伝えられるものがある」																		
	「集中力を切らせてしまった」																		
	「最後は勝ちたい」																		
	「やっぱり一番は気持ちいい」																		
	「相手に関係なく自分たちのプレーをするだけ」																		

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
 敗北を糧とし、次につなげる
 技術面だけでなく「精神面」強化
 「自信」持ちプレーに負けない
 「チーム」「仲間」「役割」意識
 失敗を恐れず「挑戦」する
 向上心持ち妥協を許さない
 「結果」「勝ち」にこだわらない
 競技に対する強い思い入れ
 「自分のプレー」「戦を楽しむ」
 練習、対戦を「楽しむ」
 勝利の喜びを知っている

32	「不調だからこそ強気で攻めていこう」														
	「何事にも中途半端が嫌い」														
	「今回ほど純粋にうれしかったことはない」														
	「普段なら勝てる相手ではないが、リードがあったので焦ることはなかった」														
	「フォーム改造に苦戦したこの1年間は苦しかったけど、充実していた」														
	「準決勝負けたことは仕方ない。最後はちゃんと勝って終わろう」														
	「勝てる状態ではない今、ミスを恐れず積極的にうっていこう」														
	「点数のことは考えていなかった。心からプレーを楽しむだけ」														
33	「オリンピックに出たい。今回はそのための通過点」														
	「もっと強くなりたかったから、他校に出向いて有名な指導者の教えを受けに行った」														
	「せっかく世界に行くから守らず攻めていきたい」														
	「どんな状況でも平常心を維持する精神力が自分を高めた」														
	「世界の舞台におくすることなく、試合を楽しめるようになった」														
	「試合は楽しむ。けどそれだけでなく、学べるところは学ぶ」														
	「楽しんでプレーできた」														
	「最終戦、気持ちは落ち着いていた」														
	「世界の舞台で自分を試す」														
	「技術だけを追い求めるのではなく精神面の重要さを身をもって知った」														
	「世界大会は勉強になった。自信にもつながった」														
	「いかに試合を楽しんで、いかに結果が残せるかが大切」														
	(決勝でも)「負ける気がしなかった」														
	「自分のペースでいけた。焦りはまったくなかった」														

選手

インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
敗北を糧とし、次につなげる
技術面だけでなく「精神面」強化
「自信」持ちブレッシャーに負けない
「チーム」「仲間」「役割」意識
失敗を恐れず「挑戦」する
向上心持ち妥協を許さない
「結果」「勝ち」にこだわらない
競技に対する強い思い入れ
「自分のプレー」にこだわる
練習、対戦を「楽しむ」、勝利の喜びを知っている

34	「勝ちたい気持ちが強すぎて、冷静さを失ってしまった」														
	「今大会の目標は自分のアーチェリーをすること」														
	「勝ち負けは関係なく、自分のやり方を貫くことが大切」														
	「逆転できたのはラッキーだったから」														
	「最後は精神力」														
	やるからには1番になりたい」														
35	「負けたくないときほど気が入る」														
	「自分の卓球ができないことに気づいた」														
	「次は必ず優勝します」														
	「春はいいようにやられたが、今回は自分たちの卓球ができた」														
	「勝負における気合の重要度は8割」														
36	「気持ち、精神力のないやつは使わない」														
	「メンバーの気持ちの入り方で、今日の試合はいけると思った」														
	「マイナスの経験は必ずプラスとなって返ってくる」														
	「例年と同じことをしていても勝てない」														
	「スタメンには闘争精神のないやつは使わない。ラグビーは気持ちがすべて」														
	「どん底の状態から強くなるためにひたすら基礎を繰り返す」														
	「個々の潜在能力は去年のほうが上だが、チームとしての潜在能力は今年のほうが上」														
	「勝たなければ意味がない」														
	敗戦の原因は「自分たちのラグビーが出来なかった」														
	「ぼちぼちやりますよ」														
「練習の少なさを敗因の言い訳にするな」															

選手 インタビューコメント

現状に満足せず上を目指す
敗北を糧とし、次につなげる
技術面だけでなく「精神面」強化
「自信」を持ちプレーに負けない
「チーム」「仲間」「役割」意識
失敗を恐れず「挑戦」する
向上心を持ち妥協を許さない
「結果」「勝ち」にこだわらない
競技に対する強い思い入れ
「自分のプレー」「戦いを楽しむ」
練習、対戦を「楽しむ」
勝利の喜びを知っている

37	「相手は強いほうが燃える。早く国立のフィールドに立ちたい」												
	「自分の力が足りなかった」												
	「1戦1戦成長できれば」												
	「アタックでは関東に負けない自信がある」												
	「1対1の局面なら絶対勝てる」												
38	「ひとつひとつのプレーを大事にしていきたい」												
	「相手がどこであろうと自分たちのラグビーをするだけ」												
	「プレッシャーを考えている暇はない。選手権での結果がすべて」												
	「関西の意地・・・見せますよ」												
	「関東は大きな壁。だけど、日本一を目指す自分たちの信念は揺るぎない」												
	「勝ちたい気持ちを全面に出せた」												
	観客としてみていることがこんなにもつらいとは思わなかった。本当に強いチームに成長した」												
	「大差で勝ったからといって満足するようではダメ」												
	「自分たちの100パーセントの力を出すことが一番大事」												
39	「相手が早大でも絶対止められる。負けてるとは思っていない」												
	(早稲田との接戦を繰り広げた後も)「勝たないと意味がない」												
	「死ぬ気でやった。同志社は変わったというところを見せてやりたかった」												
	「1回リセットし、必ず来年につなげる」												
40	「練習でくじけそうになるとこそ強くなるチャンス」												
	「甘える自分を戒めなければならない」												
	「居合道に関して決して妥協しない」												
	「特別な相手だが意識することなく勝つことだけ考えていつも通りやった」												
	「誰と当たっても勝てるだけの練習をしてきた」												
(全国制覇後)「ここが大切。5年後も10年後も日本一でいたい」													

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
 満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」 に対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
 ず上を目 次につな く「精 ンに「役 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわる い思い にこだわ しむ、 知っている
 指す げる 面」強化 シャーに 割」意識 する ない 入れ る

41	「1球の重みを改めて知ったシーズンだった」													
	「ひとつひとつのプレーの精度を上げ、勝負強さを身につけたい」													
	「全国大会は集大成。やれることはすべてやって、このチームで勝ちたい」													
	「必ず勝たなければ、というプレッシャーのなかで勝てたのは大きかった」													
	「試合で得る結果がすべて」													
	「勝ちたいという気持ちが逆に重圧になったかもしれない」													
42	「一貫して自分たちのバスケができなかった」													
	「同志社はそうやって勝ってきた。その伝統を引き継いでいきたい」													
	「ついてきてくれたみんなに感謝している」													
	「出る試合は必ず勝つ」													
43	「相撲は生活の一部」													
	「試合に出るからには、出場できない部員のためにも絶対勝つ」													
	「自分が決めてやろう」													
	「ケガをしても相撲をやめようとは思わなかった」													
44	「自信がない。いつもならやれたのに。後悔」													
	「最後まであきらめずにやればよかった。」													

選手 インタビューコメント

現状に 敗北を 技術面 「自信」 「チー 失敗を 向上心 「結果」 競技に 「自分の 練習、対 勝利の
満足せ 糧とし、 だけな 持ちブ ム」「仲 恐れず 持ち妥 「勝ち」 に対する強 プレー、 戦を「楽 喜びを
ず上を目 次につな く「精神 レッ 間」「役 挑戦」 協を許さ こだわる い思い にこだわ しむ、 知っている
指す げる 面」強化 シャーに 割」意識 する ない 入れ る

45	「寒かった。もうちょっと根性出せばよかった。」																			
	「流れを作りきれず、不完全燃焼に終わってしまった」																			
	「初めての馬で怖かった」																			
	予選から「ずっと緊張していた」																			
	「全国の人に比べたら足元にも及ばない」																			
	「もう少し積極的に乗れるように」																			
	すぐ諦めてしまう(前キャプテン談)																			
	精神的に弱い(前キャプテン談)																			
	「入賞ではなく勝たなければ」																			
	勝ちたいという気持ちが弱い。気持ちの問題。(前キャプテン談)																			
	「テレビも来てたし、周りもすごい人ばかりだったから緊張した。」																			
46	「障害が高くてめちゃくちゃビビってしまった」																			
	「馬が飛んでくれた。自分は必死に乗っていただけ」																			
	「優勝は馬のおかげ」																			
	「日々の練習を無駄にせず、必死に頑張っていく」																			
	「もっと馬と折り合いをつけていけるように」																			

